ひろしま自然保育推進事業 活動報告書

1．広島大学附属幼稚園

2．令和3年度の活動概要

（1）　環境構成について

本園は，東広島市のほぼ中央に位置し園舎の裏には豊かな森がある。子どもたちは園舎前の園庭や裏山の森に拠点をかまえ、時には自分一人で夢中になって遊んだり，時には友だちとかかわりながら試行錯誤して遊んだりと，日々自然を体中に感じながら生活をしている。自然相手の遊びは思わぬ発見があったり自分の思うようにいかないことがあったりと，常に様々な心情が湧いてくる。今年度も，この自然いっぱいの森の中で遊ぶ子どもたちの心の動きを大人が素直に捉え、子どもの心の動きに沿った援助を考えていった。あるがままの自然を利用したり、少し手を加えて子どもたちが気づくような環境構成をしたり、保育者自らも成長し続け環境構成の一部として存在していった。

（2）　遊びの事例

① 「怖いけど･･･」（6 月 4 歳児）

担任がテラスに行くと D 男が棚の上のクワガタの入った虫捕りかごを見つめている。担任がD 男の隣に行き，一緒に虫かごを見ていると，D 男は「ひっくり返したいんだけど…」と小声でつぶやく。見たところクワガタはひっくり返っている。担任は「とりあえずテーブルの上に移すね」と言って棚の上のクワガタをテーブルの上に置き，かごの蓋を外す。D 男は枝を使ってクワガタをひっくり返そうとするも，クワガタはかごの外に出てしまう。近くにいた F 男は「スコップでやったらいいよ」と言ってスコップを持ってきて E 男に渡すと，D 男は少し腰が引けた状態ではあったが，クワガタをスコップの中に収めることができた。その後，少しの間D男は枝でクワガタの羽の部分をなでるように触る。「もしかしてクワガタ触りたいの？」と担任が尋ねるとD 男は何も言わず少し後ずさる。担任はスコップでクワガタをすくい，「触る？」と聞くと，近くでその様子を見ていた F 女が近づいてくる。F 女も少しこわばった表情をしているが，数秒クワガタの様子を見た後，指先でとんと触ろうとする。「できた？」と担任が尋ねると本当は触れなかったようで，F 女は「怖いんだよ～」と言いつつももう一度クワガタに触ろうとする。今度は触れたようで F 女は「できた！」と嬉しそうな声をあげる。「F 女ちゃんやったね！」と担任が声をかけるとF女は「怖かった～」とつぶやく。F女に続いてE男もおそるおそるクワガタに触る。担任が「F女ちゃん触れたってよ。」とD男に向かって声をかけるとD男は「こっわ」とつぶやく。担任は「じゃあ先生も手でやってみようかな。先生も実は虫苦手なんやけどね…やさーしくさわってみよ」と言い，ちょこんとクワガタのあごの部分を触る。「あ！ここかたい！なんかすごいかたいわ！」と担任が驚き，「D 男君も手で触ってみて，ここ固いよすごく。」

と言うと D 男もあごの部分をさわる。D 男は「ほんとだ!」と明るい声色で驚く。続けて担任はクワガタの羽の部分の部分を触る。「あ,すごいかたい!ここ(顎)とここ(羽)で全然違うよ!」と驚き,「ねぇ D 男君,ここ(羽)さわってみて。なんかこことここで全然違う。」と D 男にクワガタに触るよう促す。D 男はすぐに羽の部分を触り,「ほんとだ…」と小声で驚く。その後 D 男や E 男,F 女はクワガタの様子を眺めながら,クワガタが動くたびにいろんな声をあげていた。

＊今回の事例では,援助においては担任自身の心の動きも大事な要素になると気づいた。子どもと同じ視座に立ち,感情を共有することの重要性を再確認することができた。自分自身も子どもの心の動きに影響されることがあるが,逆に担任の心の動きが子どもに影響を与えることもあるのだと思う。心の動きは連鎖していくと感じた。また,虫が苦手であるという部分を自分の中で負い目に感じることが少なからずあったものの,それを克服する姿を見せることが有効な援助につながるというご指摘を受け,これからは自分自身の短所も,負い目に感じることなく克服することで子どもとともに成長していきたいと思うようになった。

② 「魔法みたい」(4 月 5 歳児)

子どもたちと共に園庭へ出掛けると,まださらさらと小雨が降っている。園庭には水たまりをはじめとして,様々な雨の形跡を見付けられる。森の達人が,園庭に群生しているクローバーを指差しながら「このクローバーを見てごらん」と,子どもたちに声をかける。子どもたちは森の達人が指差す場所へ駆け寄り,口々に「わー,綺麗!」と感嘆の声をあげる。私も子どもたちの元へ赴き,子どもたちの声の原因を探す。クローバーの葉にドーム状の雨粒が乗っており,小さなものからてんとう虫程の大きさのものまで大小様々である。クローバーの葉に乗る雨粒は,光の加減によって輝いて見える。前日の園庭とは違うそのような光景を見て,子どもたちが声をあげた理由を理解した私は「すごいね。綺麗だね」と共感する。私は葉に乗る雨粒の大きさに違いがあることに気付き「どれが大きい?」と,クローバーを指差しながら子どもたちに声をかける。子どもたちはクローバーに顔を近づけ「これが大きい!」「こっちのがでっかい!」などと言いながら,クローバーの葉に乗った雨粒の大きさ比べを始める。子どもたちに混ざり「これ見て。これが 1 番じゃない」と,私も大きな雨粒を見つけたことを伝える。

しばらく“大きさ比べ競争”を楽しむと,次に子どもたちは葉の上に乗った雨粒に勢いよく触れて水滴を落とす遊びを始める。勢いよく雨粒に触れることで水滴がはじけ飛ぶ様子を見て,子どもたちは大きな声をあげて笑う。勢いのある遊びが展開され,私もその面白さに共感しながら参加する。

その後私は,クローバーの雨粒に興味をもった子どもたちの輪の中にはいるものの,雨粒を飛ばす遊びから少し離れてしゃがんでいるA男の姿に気付き近づく。A男はクローバーをぼんやりと眺めている。私がA男の近くにしゃがみ込むと,A男は私の存在に気付いて顔を上げ,小さくほほ笑む。私は自分の前に生え

ているクローバーの葉に乗った小さな雨粒に，人差し指でそっと触れる。雨粒は指先に吸われるようにして，葉の上から姿を消す。その様子を見たA男は「わっ，（雨粒が）無くなった。すごい」と言う。A男は私の動作を真似て葉の上の雨粒にそっと触れ，同様に水滴が消える様子を見て「魔法みたい」と呟き，目を輝かせながらクローバーの雨粒に次々と触っていく。私はA男のそのような姿を，しばらく見守る。

＊保育者自身が自然に対して関心をもっていることが，子どもたちに伝わり，子どもと自然とのかかわりに繋がる，という意見から，自分の自然に対する考え方を振り返ることができた。森での遊びに詳しい“森の達人”と過ごす時間は，子どもだけでなく，私にとっても，多くの気付きをもらえる楽しみなものである。保育において，“子どもの目線になって”という言葉を耳にすることが多いが，森の達人と自然の中で過ごす時間は，そのようなことを意識しなくても，子どもと同じように，新しい自然との出会いを楽しんでいる自分がいる。そのような，保育者自身が自然とのかかわりを楽しみ，大切にしようとする態度が，子どもへのかかわりや援助に表れていたのだろう。今後も，子どもたちとともに自然とかかわり，驚いたりや面白さを発見することを楽しんでいきたいと思う。

3歳、4歳、5歳の事例もたくさん本園の研究紀要第 43巻（令和3年度）に掲載している。ご覧になりたい方は本園まで連絡をいただきたい。

（3）　その他、自然体験活動の実施にあたって工夫したこと

① カンファレンスの実施

毎月各担任がエピソードを持ち寄りカンファレンスを行った。参加者は担任、副担任、養護教諭、小学校教員の６名。これまでのカンファレンスではエピソードに加え、担任の考察を明記していたが、今年度はエピソードのみを見合い、それぞれの捉えを交流することで幅広く子どもの姿を捉えることにした。カンファレンス後、担任が参加者の意見をふまえ捉えたことを記録する形にしていった。考察のないエピソードを見ることで、実際に自分がその場にいる感覚で子どもの姿を捉えようとすることができ、子どもの心の動きを豊かに捉えることができた。

② 大人が心を動かす

自然を前に子どもたちが感動していること、不思議に思っていることなどに側にいる大人が心を寄せるということは当たり前のことだが、子どもたちの心が動く前に大人自身も自然の豊かさにふれ、心を動かすことを意識していった。